

図書館だより

目次

ローマの国立近現代史図書館	—北村 暁夫	1
日本女子大学叢書の紹介		
佐藤亜莉華著『醍醐寺の法流と史料』	—佐藤亜莉華	2
著作紹介 内村理奈著		
『名画のコスチューム：拡大でみる60の職業小事典』		
『名画のプリンセス：拡大でみる60の衣生活事典』		
	—内村 理奈	3
ケルムスコット・プレス版『十五世紀ドイツ木版画集』		
	—川端 康雄	4
静かな「対話」	—真船 陽	6
図書室という贈りもの	—近藤 史織	6
2024年度上代タノ平和文庫購入資料紹介		7
ようこそ！日本女子大学図書館へ	—中澤 恵子	8



近現代史図書館の中庭

ローマの国立近現代史図書館

北村 暁夫

私がイタリアで最も頻繁に通い、長い時間を過ごした図書館が、ローマ中心部にある国立近現代史図書館 Biblioteca di Storia Moderna e Contemporanea (BSMC) である。近現代史を専門とする図書館というのは比較的珍しいと思うが、この種の図書館が存在するのは19世紀半ばに国家統一を果たしたイタリアの歴史が背景にある。20世紀前半の哲学者・美学者・歴史家であるベネデット・クローチェは、「イタリア統一以前にイタリア史は存在せず、存在するのはナポリ王国史やトスカーナ大公国史といった諸国家の歴史である」といった趣旨のことを述べたが、たとえば統一以前のミラノの歴史に関心を抱く南イタリアの人は多くなく、逆にナポリ王国の歴史に関心を抱く北イタリアの人も多くないので、統一以前に関してはそれぞれの地域の図書館がそれぞれの地域の歴史書を揃えれば、たいいていの用は足りる。それに対して、統一以後の歴史はたとえ地域史的な要素が含まれたとしてもイタリア史の一部であり、それゆえ近現代史を専門とする図書館が必要とされ、その図書館はイタリア統一国家の首都となったローマに置かれることがふさわしいと考えられたのである。

この図書館は、もともと19世紀末にリソルジメント（18世紀末から19世紀半ばにかけてのイタリア統一をめざす運動を指す）関連の史料や書籍を収集する場として生まれ、ファシズム期の1930年代に正式に近現代史図書館と命名されて、現在の場所に設置されることになった。図書館が入る建物はマッテイ・ディ・ジョーヴェ館といい、ローマの有力貴族マッテイ家が16世紀末から17世紀初頭にかけて建設した4階建ての屋敷である。1930年代に国有化され、現在もイタリア文化省が管轄している。いくつかの文化機関が入るが、その3階と4階が近現代史図書館に充てられている。現役で使用されている国有の建物なのでメンテナンスが万全とは言えないが、それでも天井には17世紀に描かれた絵画が残存し、中庭を見物に来る観光客も散見されるような建築物である。こういった場所で勉強していると、イタリアを対象に研究することの醍醐味を肌で感じることができる。

私が最初に留学した1990年代初頭には、この図書館は近現代史を学ぶ多くの学生でにぎわっていた。だが、最近では利用する人の数が激減し、利用者の高齢化も著しい（私もその一人である）のは寂しい限りである。留学時代にお世話になったローマ大学名誉教授に聞いたところでは、ローマ大学では専攻する学生数の減少に伴い、歴史学の正教授の数がかつてに比べて半減したという。学生は就職のためにITや経営などの学部へ殺到し、歴史など学ばないのだとか。新自由主義の猛威、恐るべしである。その話を聞くと、歴史を学んでも就職にほぼ何の支障もない日本の大学／企業の就活システムが、どれほど有難いか痛感するのである。

(館長・史学科教授)

佐藤亜莉華著『醍醐寺の法流と史料』（日本女子大学叢書27）

佐藤 亜莉華

醍醐寺は、真言密教小野流および修験道当山派の中核寺院である。弘法大師空海の法燈を受け継いだ聖宝が、貞観16年（874）に開創した。同寺の座主を相承する三宝院門跡は、しばしば公武権力から祈禱の依頼を受け、世俗社会と深い繋がりをもったことで知られる。醍醐寺には、僧侶の祈禱や修学を支えた聖教と呼ばれる史料群を中心に、寺院の運営・経営、世俗社会との折衝など、様々な目的で生成された典籍・古文書等が伝来する。約10万点、800函を超える創建以来から近代に至るまで蓄積された史料のうち、558函までが平成25年（2013）に『醍醐寺文書聖教』として国宝指定を受けた。

筆者が『醍醐寺文書聖教』と出会ったのもこの年に遡る。永村眞先生（現名誉教授）の授業を受講していたご縁で、お声がけいただいたアルバイトがきっかけであった。当時、本学の非常勤講師と同寺霊宝館学芸員を兼務されていた藤井雅子先生（現史学科教授）のもと、同史料群データベースの入力・校正に従事することになった。その後、ほどなく同寺の文化財調査に撮影補助として参加する僥倖に恵まれた。先輩方に付きっきりでご指導いただきながら、直に史料に触れた感動は忘れられない。信仰の対象として、多くの人々の手で守られてきたからこそ、数百年の時を超えて存在していることを実感した、鮮烈な体験であった。明治43年（1910）の予備調査を経て、大正3年（1914）に開始された学術調査が、形を変えながら現代まで継続されていなければ、本書は間違いなく生まれなかったであろう。『醍醐寺の法流と史料』は、約10年にわたる本学での研究生活の集大成といえる。

本書は、醍醐寺が真言密教寺院として存続してきた理由を論考したものである。法流と呼ばれる真言密教の流派を軸に、寺内外の人間関係を解き明かすことで、寺院社会が世俗権力と関わる中で、どのように折り合いをつけていったのかを考察した。先行研究は、主に古代から中世における三宝院門跡を軸に深化・細分化してきた。本書では、門跡だけでなく、門跡を支えた僧侶たちにも目を向けながら、近年の調査によって整理されつつある近世史料を活用し、中世から近世へと移行する醍醐寺の実像を探ることを目指した。

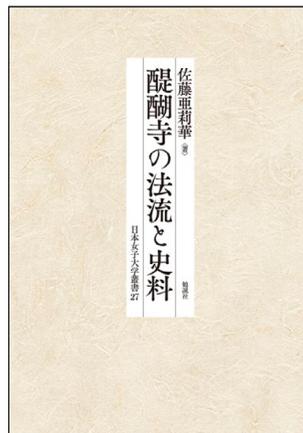
まず、中世において、醍醐寺僧がいかにして自流を守り伝えようとしていたのかを論じた。密教の秘法を相承することで成立する法流は、師と弟子、正嫡とそれ以外の弟子といった序列を発生させた。本研究の原点は、こうした密教寺院社会特有の論理への興味にある。同寺で中核とされてきた三つの法流（三宝院流・理性院流・金剛王院流）に注目し、僧侶の協調・対立を紐解いた。

次に、三宝院門跡とそれを支えた諸階層を中心に、中世・近世における醍醐寺運営を追った。先行研究において、三宝院門跡が寺内の中核を担えなかった時期があることは言及されてきたが、その時期において寺院がどのように維持されていたのかは詳らかでない。各時代における三宝院門跡と僧団のあり方から、醍醐寺という組織の変遷を辿っている。

最後に、法流相承で必ず意識された「先師」「祖師」ごとのまとまりに焦点を当て、史料群の生成過程と後世での活用について検証を行った。醍醐寺の転換点において史料群を生成した僧侶に注目することで、『醍醐寺文書聖教』の成立過程に迫ろうと試みた。

以上の通り、醍醐寺がいかにして信仰を守り伝えてきたのか、価値観と組織の変化を論考した。寺院を取り巻く社会構造を明らかにする上で、寺院の内部で何が起きていたのかを知ることは重要である。膨大な史料群を有する醍醐寺の変容を通史的に整理することを目指した本書が、同寺の中世史と近世史を結びつけるだけでなく、寺院史研究とその他研究分野の橋渡しとなれば幸いである。

(元史学科助教)



著作紹介

内村理奈著 『名画のコスチューム—拡大でみる60の職業小事典—』

『名画のプリンセス—拡大でみる60の衣生活小事典—』

内村 理奈

『名画のコスチューム—拡大でみる60の職業小事典—』（創元社、2023年）と『名画のプリンセス—拡大でみる60の衣生活小事典—』（創元社、2025年）は、『日本女子大学図書館だより』No.173（2022年3月）号にて紹介していただいた『名画のドレス—拡大でみる服飾小事典—』（創元社、2021年）に続く姉妹編2作になります。この3冊で、「名画シリーズ3部作」になればいいなと密かに思っているところです。いずれも、フランスを中心とする西洋絵画を60作品とりあげて、『名画のコスチューム』では描かれている人物を職業ごとに分け、その服飾の特徴を解説し、『名画のプリンセス』では、フィクションも含む歴代のプリンセスたちに着目し、彼女たちの衣生活の60シーンを解説したものにしました。今回も、絵画の全体図と私が着目したい服飾にフォーカスした拡大図をいっしょに掲載し、読者が楽しく鑑賞できるようにしました。

『名画のコスチューム』は、西洋服飾史の概説書（和洋書問わず）では省かれてしまいがちな、西洋中世から近代にかけての市井の働く人々の服装に目を向けて叙述しました。西洋服飾史は往々にしてモードを牽引していた王侯貴族の煌びやかな服飾ばかりを追ったものになるので、普通の人びとがどのような服装をして生活していたのかは、意外と知られていません。ですが、普通の働く人びとにも彼らの服飾史が存在したわけですし、また職業や身分に固有の服飾というものも、いつの時代にも存在してきました。そうした意味で、本書は costume という語をタイトルに使いました。つまり costume は、言葉の成り立ちから考えると、時代や国や地域、民族、あるいは職業や地位や身分、さらに儀式や場面にもふさわしい衣服のことを指す言葉だからです。衣服を表す言葉は日本語も英語もフランス語もいろいろありますが、コスチュームは舞台衣装などを指すこともあるように、着用者の属性に結び付けられた衣服を指している言葉です。こうした視点から絵画を見ていくと、今まで気づかなかったような普通の人びとの過去の時代の衣生活が生き生きと浮かび上がってきて、歴史のもうひとつの側面を語る事ができたように思います。

『名画のプリンセス』は、また西洋服飾史を一巡して、王侯貴族のプリンセスたちの衣生活にあらためて目を向けてみることにしました。服飾史ではそれぞれの時代にどのような服装が流行っていたかが語られるので、王侯貴族のことを語る事が多い服飾史概説書であっても、彼女たちの日々の衣生活がどのように展開されているかは、やはり記されているわけではないからです。童話の主人公であるプリンセスを含む、歴代の西洋のプリンセスが、朝起きてから寝るまで、そして、人生のさまざまな節目に、どのような服装をしていたのか、そのシチュエーションごとに服装の決まり事などがあったのかどうかなど、プリンセスの日常のさまざまな服装をありとあらゆる角度から光をあてて語ってみました。プリンセスの日々の暮らしと人生をすこし覗き見るような感覚でもありました。ただし、プリンセスの公的な肖像画などの装いは、まさしくオートクチュールのはしりといってもよい服飾の超絶技巧が見受けられて、その美しさには目を奪われるものがあり圧巻です。

西洋絵画を仔細に眺めてみると、市井の人びとの衣生活も、プリンセスたちの衣生活も、新たな発見がたくさんあります。服飾史という視点から絵画を読み解く面白さを、読者の方々にも感じていただけたらうれしく思います。

(被服学科教授)

2023年5月 創元社発行 255頁 *図書館目白所蔵 請求記号 383.1-Uch

2025年8月 創元社発行 255頁 *図書館目白所蔵 請求記号 383.15-Uch



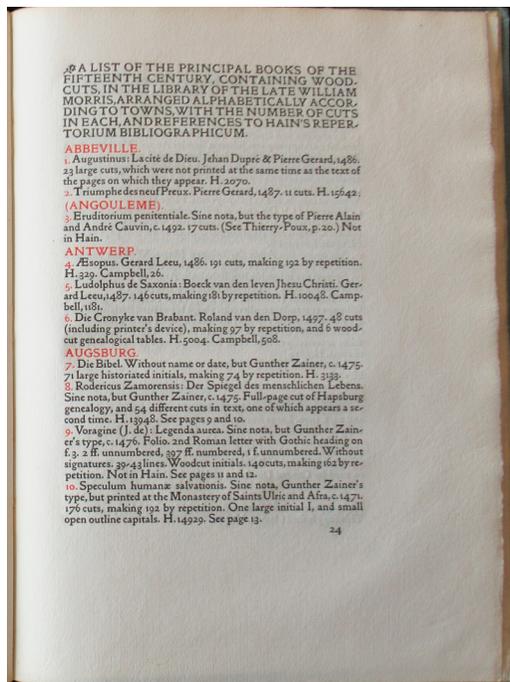
ケルムスコット・プレス版『十五世紀ドイツ木版画集』

川端 康雄

ケルムスコット・プレス（以下、KPとも略記する）でウィリアム・モリスがおこなった「印刷の冒険」(typographical adventure)は、1893年発表のエッセイ「印刷」で述べられているように、よくデザインされた活字を見開き2頁のなかで適切な案配で組むことを基本とした。だから必ずしも挿絵を必須としたわけではないが、それでもKPの全53書目のうち16書目が挿絵を含む。本連載の前回、前々回で見たように、本の挿絵についてもモリスの関心は並々ならぬものだった。自身の楽しみということもあったが、KP本での本造りの参考にする目的も併せ持って、晩年のモリスは挿絵入り本の古書の蒐集に情熱を注いだ。その蔵書のうち、ドイツで刊行された「インクynaブラ(揺籃期本)」——すなわち1450年代のゲーテンベルクの活版印刷術発明から15世紀末にかけて製作された印刷本——のなかから選りすぐった木版画を復刻し、冒頭のモリスの序文、巻末に書誌情報を附した本が今回取り上げる『十五世紀ドイツ木版画集』である。1896年10月に没したモリスに代わって、1898年2月に最後の刊本を出して印刷所を閉じるまで、実質的にKPの運営を担ったシドニー・コッカレル(1867-1962)が本書の編集にあたった。書誌データは以下のとおり。

KP書目第49番『十五世紀ドイツ木版画集』(*Some German Woodcuts of the Fifteenth Century*)シドニー・コッカレル編。大型4折判、パーチ紙(290×213mm)。72頁。ゴールドン・タイプ。二色刷。木版画35点を復刻(1点を除き線画凸版による)。クォーター・ホランド装。紙刷本225部。ヴェラム刷本8部。コロフォン日付1897年12月15日。KPより1898年1月6日発売。価格30シリング(紙刷本)、5ギニー(ヴェラム刷本)。

編者のコッカレルについては、これまで本連載のなかでたびたびふれてきたが、ここで多少詳しく経歴を述べておく。英国南部ブライトンの出身で、名門パブリック・スクールのひとつセント・ポール校(ロンドン)を卒業後、家業のコッカレル商会に事務員として就職。モリスと出会ったのは1886年、19歳のときだった。1892年10月にモリスは自身の所蔵する中世写本とインクynaブラの蔵書の目録作成をコッカレルに依頼した。几帳面な性格のコッカレルは生涯にわたって日記を丹念につけていて、モリスの秘書を務めた期間のものについてはKPの貴重な資料となっている。1893年1月10日付の記載にはこうある。「WMの本の目録づくりは、本当に人が羨む仕事で、これに私は2か月間取り組んでいる。もう少しかかるだろう。これを終えたらほかの仕事をもっと簡単に得ることができるだろう。すでに15世紀のさまざまな活字体についてある程度わかりかけている」。この仕事への報酬は週給2ギニーとKP版『黄金伝説』1冊であった。この仕事をきちんとこなしたことで、モリスの信頼を得て、1894年に二代目のKP秘書となった(初代はハリデイ・スパーリング)。その報酬にもまして、出版者のF. S. エリスや書誌学者のロバート・プロクターらの助言を受けつつ二十歳代半ばでコッカレルがおこなったこの仕事は、書誌学の格好の修業となり、後年のケンブリッジ大学附属フィッツウィリアム博物館長(1908-37)としての赫々たる業績の土台となっ



KP版『十五世紀ドイツ木版画集』24頁。コッカレルによる目録。(所蔵：日本女子大学図書館)

た。モリスのほかに、ラスキン、オクタヴィア・ヒル、バーナード・ショー、T. E. ロレンス、トマス・ハーデイらと親交を結び、手紙を交わした。1934年にナイト爵に叙せられた。1955年にモリス協会が発足された際に初代会長となり、没する1962年までその任にあった。

さて、上記の蔵書目録をモリスはKPの刊本のひとつとして出す意向であった。コッカレルの作成した書誌情報にモリス自身の注を加え、豊富な図版を入れた目録である。出版業界の週刊誌『ブックセリング』の1895年クリスマス号に掲載されたモリスへのインタビュー記事のなかで、この蔵書目録のKP版を準備中であることを紹介し、「もちろんこれは私個人の楽しみのためのちょっとした気まぐれにすぎませんが、それでもその本に喜びを覚える愛書家や芸術愛好家が多くいるはずだと思います」と語っている。だがあいにく翌年にモリスは病死し、この蔵書目録は他の少なからぬ企画とともに刊行中止となった。その代わりとしてコッカレルが編んだのがこの『十五世紀ドイツ木版画集』なのだった。モリスが1894年に執筆した論文「十五世紀のウルムとアウグスブルクの木版画入り本の芸術的特性について」（『ビブリオグラフィカ』第1号、1895年刊）の抜粋（3割程度削減）を序文とし、図版は『蔵書目録』用にモリスが選んで準備してあった29点と、『ビブリオグラフィカ』への論文で用いたなかから6点、併せて35点を復刻した。1点を除き図版はウォーカー・アンド・バウタル社で線画凸版で原寸大で刷られている。

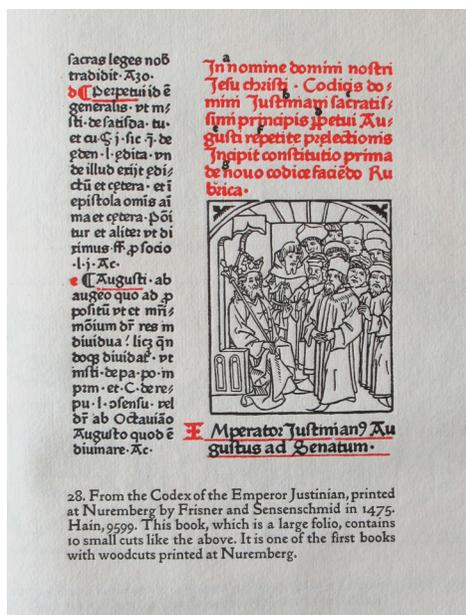
モリスはその序文のなかで、自身の所蔵するアウグスブルクのギュンター・ツァイナーやウルムのヨハーン・ツァイナーら初期印刷者の木版画入り本を具体的に紹介したうえで、それらの書物自体と挿絵のいずれにも「装飾的特性」と「物語を語る特性」という二つの主要な長所ゆえに「芸術作品と呼ぶ資格がある」と断じている。

これら二つの性質は、本の絵において必要不可欠なものを含んでいるように思われる。確かにこれら無名のドイツの画家たちの主要な目的は、何としても物語の本質を伝えることであり、それらのデザインの装飾的性質は偶然の産物、あるいはなんにせよ無意識裡になされたものと考えられるのかもしれない。この見方には必ずしも反対ではない。しかしその偶然は、主として伝統の結果である技術を備えた、腕の立つ職人の偶然なのである。それによって装飾的な仕方ですることが彼にとって手の習慣と化している。

ゴシック様式がより根づいていたドイツでは、その伝統がイタリアよりも多少長く続いていたが、16世紀初頭に突然終わった。それに代わって「異常に愚かく野蛮な様相を帯びた大袈裟でアカデミックな芸術」が現れ、「以来それがあらゆる装飾の問題においてヨーロッパを呪縛してきたのである」と、いかにもモリスらしく、ルネサンス・近代文明批判を最後に述べて論を結んでいる。

この本の前評判は高く、発売前の1897年11月の時点で売約済みとなった。その頃製本工房のレイトンに宛てた手紙でコッカレルは「〔締め切り後も〕注文が引きも切らず来ます。人びとがこんなに熱心に欲しがっているのは、印刷所を閉める知らせを出したからではないかと思っています」と書いている。直前に彼はKPの出版案内で「新年の早い時期に印刷所を閉じる予定です」と告知していたのだった。

(文学部名誉教授)



KP版『十五世紀ドイツ木版画集』18頁に復刻された『ユスティニアヌス法典』（ニュルンベルク、1475年）の1頁。コッカレルによる脚注付（所蔵：日本女子大学図書館）

静かな「対話」

真船 陽

図書館は、静かな場所。そういったイメージを多くの人が持っていると思います。余計な私語は慎んで、勉強や読書、調べ物をする場所。

たくさんのルールがある場所を、人はどこか近寄りがたく感じます。実際、日本女子大学の図書館にも多くの守らなければならないルールがあり、館内にはいつも独特の空気が漂っています。

しかし、「自分はそういう空気が苦手だから」「特に用がないから」「静かにしているより誰かとおしゃべりをしているほうが好きだから」……そう思っている人にこそ、私は図書館に足を運ぶことをお勧めしたいです。

新一年生の皆さんには、たくさんの“初めて”がある中で、初めて出会う人と、初めましての会話をしてきたことと思います。初対面の人と距離を縮めたいとき、相手のことを深く知りたいときに、会話はとても大切です。コミュニケーションを重ねて、人は新しい環境になじんでいきます。

けれど、大学という新しい環境で生活していくことは想像以上に疲れることです。会話に疲れてしまう瞬間。そもそも新しい環境自体がとても苦手。そう感じる人もいるのではないのでしょうか。

そんな時には、ぜひ図書館を利用してください。図書館でも会話による交流は生まれますが、本当の醍醐味は別のところにあります。

大きな窓から差し込む自然光の下で、厳選された専門書や辞書、多くの文学作品に触れているとき、私は目の前の本と確かに「会話」をしていると感じます。

私たちは指先ひとつで多くの情報を手軽に得られる時代に生きています。

しかし、時間をかけなければ手に入らない情報や知識、感動に、「気軽に」出会ってしまう場所が図書館です。本との会話は効率を求めるものではなく、自分自身を満たすための行為です。同じ手で得る情報でも、自分の指先でめくって得た情報には知識以上の価値があると思います。

ぜひ、図書館に足を運んで、多くの「対話」を重ねてみてください。 (史学科・1年次学生)

🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ 🌸🌸🌸 新入生のみなさんへ

図書室という贈りもの

近藤 史織

「とても信じられない、こんなに沢山の本はじめて見たわ」

ディズニー映画『美女と野獣』(1991)で、町娘のベルは野獣からの贈りものに心をときめかせます。不器用な野獣なりの精一杯の愛情表現が、彼女に図書室という空間を贈ることでした。村の小さな本屋に通うベルにとってはこの上ない贈りものです。しかし、野獣はまだ彼女が無類の本好きであることを知らずにいます。大きなお城の中で、なぜ彼は図書室を選んだのでしょうか。

そんなことを考えたのは、冒頭のベルのセリフが蘇ってきたときでした。こんなに沢山の本はじめて見たわ。残念ながら、私はそれを彼女のような感動と共に思い出したのではありません。課題の締切りが迫る中で何を手に取るべきかわからず、沢山の本を前に呆然とするばかりでした。それもパソコン画面に映るデジタル化された〈本〉の前に。

知の歴史が蓄積された空間は、時代と共にデジタルの世界に移行されつつあります。しかし、そこを覗き見るときの感動は失われるものではありません。それにも関わらず、まるで情報の陳列棚のように〈図書館〉を捉えている自分がいました。なぜ、野獣は図書室を贈ったのか。それは図書室が自由に繋がる空間だったからだと考えられます。お城の外に出すことはできなくとも、自由を奪いたいわけではない。彼女もその想いを汲み取ったからこそ野獣に感謝するのです。

ベルの黄色いドレスに憧れた幼い頃、私たちはどのような気持で書店の棚を眺めたでしょうか。ページをめくる先には、どんな世界が広がっていたのでしょうか。もはや遠い昔の記憶かもしれません。しかし、たとえ思い出せなくても、大学図書館の司書の方やラーニング・サポーターとの会話から、新しい世界への扉は開くかもしれません。あの頃のような感動と共に、心惹かれる一冊を手にとってみたい。その時にこそ、とても信じられない魅力的な世界が目の前に広がるのではないかと思うのです。

(文学研究科日本文学専攻博士後期課程3年次学生)

2024年度上代タノ平和文庫購入資料紹介

「上代タノ平和文庫」は、旧図書館の開設を主導した第六代学長、上代タノ先生（1886-1982）から寄贈された資料を基に1971年に創設された。現在も継続して収集が続けられている。

2024年度に「上代タノ平和文庫」の蔵書として購入された図書の一覧は下記のとおりである。今回、ストックホルム国際平和研究所発行の『軍備・軍縮年鑑』（SIPRI Yearbook）をバックナンバーも含めて購入した。図書館4階に設置されている。

配列は資料種別・請求記号順

	請求記号	資料情報
1	210.75 End	悼むひと：元兵士と家族をめぐるオーラル・ヒストリー / 遠藤美幸著。-- 生きのびるボックス, 2023.
2	210.75 Mae	未来への遺言：いま戦争を語らなきゃいけない / 前田浩智, 砂間裕之著。-- 晶文社, 2024.
3	210.75 Man	広島原爆：記憶と問い / 真鍋禎男著。-- あげき書房, 2020.
4	210.75 Sen	戦争のかけらを集めて：遠ざかる兵士たちと私たちの歴史実践 / 清水亮, 白岩伸也, 角田燎編；塚原真梨佳 [ほか執筆]。-- 図書出版みざわ, 2024.
5	217.606 Gem	原爆スラムと呼ばれたまち：ひろしま・基町相生通り / 石丸紀興 [ほか] 著。-- あげき書房, 2021.
6	227.99 Abe	パレスチナと和平交渉の歴史：二国家解決と紛争の30年 / 阿部俊哉 [著]。-- みすず書房, 2024.
7	292.221 Aok	南京大虐殺から雲南戦へ：日本の中国侵略から敗戦に至る足跡を巡る / 青木茂著。-- 花伝社, 2024.
8	302.393 Dra	戦争はいつでも同じ / スラヴェンカ・ドラクリッチ著；梶井裕美訳。-- 人文書院, 2024.
9	312.4 Rek	歴史が生みだす紛争, 紛争が生みだす歴史：現代アフリカにおける暴力と和解 / 佐川徹, 竹沢尚一郎, 松本尚之編。-- 春風社, 2024.
10	312.448 Ste	名前を言わない戦争：終わらないコンゴ紛争 / ジェイソン・K・スターン著；大石晃史, 阪本拓人, 佐藤千鶴子訳。-- 白水社, 2024.
11	316.822 Muq	在日ウイグル人が明かすウイグル・ジェノサイド：東トルキスタンの真実 / ムカイダイス著。-- ハート出版, 2021.
12	316.8228 Muq	あなたは東トルキスタンを知っていますか？：日本はウイグルジェノサイドにどう向き合うべきか / ムカイダイス著。-- 明成社, 2024.
13	319.380386 Kat	ウクライナ侵略を考える：「大国」の視線を超えて / 加藤直樹著。-- あげき書房, 2024.
14	319.380386 Ovs	2022年のモスクワで、反戦を訴える / マリーナ・オフシャンニコワ著；武隈喜一, 片岡静訳。-- 講談社, 2024.
15	319.386038 Mar	ルポ悲しみと希望のウクライナ：難民の現場から / 丸山美和著。-- 新日本出版社, 2024.
16	319.8 Hei	「平和都市」ヒロシマのまがりかど：広島市平和推進基本条例の制定過程を検証する / 宮崎園子 [ほか] 著。-- 西日本出版社, 2024.
17	319.8 Hib	被爆者から「明日の語り手」へ：核兵器禁止条約から廃絶に / 赤旗編集局編。-- 新日本出版社, 2024.
18	319.8 Ise	14歳からの非戦入門：戦争とジェノサイドを即時終わらせるために / 伊勢崎賢治著。-- ビジネス社, 2024.
19	319.8 Kak	核兵器と戦争のない世界をめざす高校生たち：平和集会・平和ゼミナールの50年 / 高校生平和ゼミナール全国連絡センター編。-- 大月書店, 2024.
20	319.8 Kme	核兵器禁止条約：「人道イニシアティブ」という歩み / アレクサンダー・コメント著；古山彰子, 林昌宏訳。-- 白水社, 2024.
21	319.8 Oku	「原爆裁判」を現代に活かす：核兵器も戦争もない世界を創るために / 大久保賢一著。-- 日本評論社サービスセンター, 2024.
22	319.8 Sen	戦争ではなく平和の準備を / 川崎哲, 青井未帆編著。-- 地平社, 2024.
23	319.8 Uem	平和国家の戦争論：今こそクラウゼヴィッツ『戦争論』を読む / 植村秀樹著。-- 流通経済大学出版会, 2024.
24	319 Mor	戦争の論理と平和の条件：ガザ, ウクライナ… / 森原公敏著。-- 新日本出版社, 2024.
25	329.7 Tod	ジェノサイドを考える：ガザ・ウクライナ・原爆・ホロコースト・東学農民を手がかりに / 戸田清著。-- 南方新社, 2024. -- (南方ブックレット；13).
26	362 Yam	社会発展史：現在と未来をみとおす確信を / 山田敬男著。-- 新版。-- 学習の友社, 2024.
27	369.37 Aib	原爆被爆者の暮らしとトラウマ：絡み合いを描きだす / 愛葉由衣著。-- 春風社, 2024.
28	396.21 Tsu	陸軍将校たちの戦後史：「陸軍の反省」から「歴史修正主義」への変容 / 角田燎著。-- 新曜社, 2024.
29	404 Ike	彷徨える現代を省察する：科学者の世界の見方 / 池内了著。-- 而立書房, 2024.
30	498.02257 Nak 2	中村哲思索と行動：「ベシヤワール会報」現地活動報告集 / 中村哲著；下：2002～2019。-- ベシヤワール会, 2024.
31	723.1 Yam	いのちの絵から学ぶ：戦争・原発から平和へ / 山内若菜絵・文。-- 彩流社, 2024.
32	911.162 Yos	与謝野晶子の戦争と平和：戦乱期中国へのまなざし / 張競著。-- 東京大学出版会, 2024.
33	911.36 Nag	原爆と俳句 / 永田浩三著。-- 大月書店, 2024.
34	916 Hom	シベリア日記：太平洋戦争並びに在ソ俘虜生活を体験せる一兵士の記録 / 本間仲治著；本間村紀編。-- 文藝春秋企画出版部, 2024.
35	936 Abu	ガザ日記：ジェノサイドの記録 / アーティフ・アブー・サイフ著；中野真紀子訳。-- 地平社, 2024.
36	980.2 Rol	マーシャの日記その後：旧ソ連のユダヤ人差別 / マーシャ・ロリニカイテ著；ミーシカの会, 清水陽子訳。-- 新日本出版社, 2024.
37	O.S. 223.5 Fur 1	カンボジアの行政 / A. シルベストール著；坂本恭章訳；上田広美, 岡田知子編。-- めこん, 2019. -- (フランス保護国時代のカンボジア；第1分冊).
38	O.S. 223.5 Fur 2	ナガラワッタ / 坂本恭章, 岡田知子訳；上田広美編。-- めこん, 2019. -- (フランス保護国時代のカンボジア；第2分冊).
39	P 327.1 W	SIPRI yearbook : world armaments and disarmament / Stockholm International Peace Research Institute. --2015～2017, 2024. -- Almqvist & Wiksell.

ようこそ！日本女子大学図書館へ

日本女子大学生の皆さん、当館を利用したことはありますか？ 泉山地区との間を横断歩道が阻んでおりますが、信号待ちの時間も外観を楽しんで、軽やかにご来館いただければ！と思います。

ご来館の際は、当館ホームページの開館カレンダーで開閉館日程と開館時間を確認してください。

日本女子大学図書館ホームページ URL

< Web サイト > <https://lib.jwu.ac.jp/>

< モバイルサイト (スマートフォン対応) >

App Store, Google Play ストアから「Ufinity」と検索してアプリを入手できます。

「Ufinity」の中から「日本女子大学図書館」を選択設定してください。

日本女子大学図書館 X URL https://x.com/JWU_Library



当館正面玄関の上には「VERITAS VIA VITAE」というラテン語の標語が掲げられています。この標語は、旧図書館の外壁にも掲げられていたもので、この図書館にも引き継がれました。

入口エントランススロープを上った2階カウンターで学生証・教職員証をご提示ください。バーコードがある学生証はそれを図書館システムに登録し、それ以外の方には利用カードを交付します。入館や貸出に必要な学生証及び利用カードは本人のみ有効です。

当館は開架式です。書架へ行く

前に OPAC (Online Public Access Catalog: オンライン目録) で本学の蔵書を検索し、配置場所と請求記号を調べましょう。資料は、和書、洋書、雑誌、参考図書、大型本など、その性質や形態によってまとめて配置されていますが、同じ請求記号でも配置場所 (例: 図書館目白/図目集密/図目通信/図目上代) により目指す階が異なります。また、西生田保存書庫資料は図書館へ取り寄せて利用できますが、研究室資料は図書館にはなく各研究室利用規則に従ってのご案内となります。



研究室資料は図書館にはなく各研究室利用規則に従ってのご案内となります。

当館ホームページから My JWULIS (Japan Women's University Library Information System) も活用しましょう。利用状況の確認、貸出更新、OPAC の検索結果から予約 (貸出中図書予約、保存書庫保管図書取り寄せ)、検索結果・検索式の保存を行うことができます。

資料の検索方法がわからない、必要な資料が見つからないという時は、2階カウンターの隣にある参考係に相談してください。皆さんの必要とする文献や情報を探し出すサポートをします。

JWU ラーニング・コモンズさくらでは、図書館の資料や DB を使って様々な学修活動を行ったり、ラーニング・サポーター (専攻推薦を受けた本学大学院生) に学修相談することもできます。

(館員・中澤恵子)

編集後記 2026年1月以降に変更がある研究支援ツールやデータベースをご紹介します。研究支援では1月に「学認」が導入され、学外からのデータベースやオンライン誌へのアクセス方法が増えたほか、研究データを安全に保存し共同研究にも利用可能となった。一方、参考文献の管理ツール RefWorks は3月末で提供終了となる。データベースでは1月から Gale Academic OneFile および Gale General Onefile が新規で追加となり、英米の主要新聞や学術ジャーナルなどを提供している。4月から ProQuest Central は ProQuest Research Library に変更する。(水嶋) 2025年度編集委員: 水嶋寿恵, 鈴木学, 南木香織

日本女子大学図書館だより No.185 2026.3.16 ホームページ <https://lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html>

日本女子大学図書館発行 〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号 ☎ (03) 5981-3195